



超越者となったおっさんは マイペースに異世界を散策する4

α L P H α L I G H T

神尾優

Kamio Yu

アルファライト文庫



主な登場人物

ソルディアス

ホクトーリク
王国の王太子。
バーラットとは
旧知の間柄。

テスネスト

レクリアスの治療を
担当する、
回復系魔法に特化した
宮廷魔導師。

レクリアス

呪術のせいで長く
臥せっている。
ソルディアス王太子
の愛娘。

バーラット

SSランク冒険者。
隙あらば酒に
手を出す、困った
おっさん。

レミー

隣国出身の
Dランク冒険者で、
隠密行動に
長けた忍者。

ネイ

本名、橘翔子。
ヒイロと同時に
召喚された勇者の
うちの一人。

ニーア

明るく活発な、
ぼくっ娘妖精。
邪妖精とは一緒に
しないで欲しい。

ヒイロ

神様から
最強スキルを買い、
異世界を旅する
42歳のおっさん。

第1話 親睦会……？

ある日突然、若者限定の筈の勇者召喚に選ばれた冴えないおっさん、山田博四十二歳。神様から【超越者】【全魔法創造】【一撃必殺】という三つのチートスキルを与えられた彼は、ヒイロと名を改めて、異世界を旅することとなった。

妖精のニア、SSランク冒険者のバールット、そして忍者のレミーと共に行動していた彼は、最強種と名高いエンペラーレイクサーペントの牙を王族に提供したために、王都に呼び出される。

道中で港街キワイルに立ち寄った一行は、街周辺の瘴気の調査と原因の排除を、教会の司祭シルフィーに依頼された。そして司祭に同行していた日本出身の勇者ネイと協力し、無事に依頼を達成したのだが、ヒイロの生み出した新魔法が派手すぎて、街ではちょっとした騒ぎが起きてしまう。

騒ぎの原因だと特定されては厄介だと考えたヒイロ達は、勇者ネイを仲間に迎え入れると、慌てて街を飛び出して王都を目指すのだった。

キワイルの街を逃げるように出発して五日が経った頃、ヒイロ達はクシマフ領と王都直轄領との領境を越えた辺りで野営を行なっていた。

「ここまで順調に進んでいますよね。この調子だと王都まで後どのくらいかかるんですか？」

洗った米の上に白身魚の切り身を載せ、海藻で取った出汁と醤油を入れた土鍋を火にかけながら尋ねるヒイロ。それに対してテーブル席に座ってフルーツから作った食前酒を楽しんでいたバーラットが呑気に答える。

「このまま順調に行けば三日から四日つてところだな。まあ、このルートの一番の難所だった瘴気の周辺は越えられたから、この先はおおむね予定通りに行けるだろ」

日が西の山に差し掛かり、赤い日差しに辺りが染まる穏やかな夕暮れ時。

心地好い風に短い草花がなびく原っぱ、その中にボツンと置かれた場違いな丸テーブルは、ヒイロが時空間収納から出した物だ。

うゝん平和です。などと思いながらヒイロが隣を見ると、道中の山道で採ったキノコ類を七輪で焼くレミーの姿があった。

おかずも着々と出来上がりつつあり、後はご飯が炊き上がるのを待つばかり。ヒイロは立ち上がると、少し離れたところで一人こちらに背を向けて、顎に手を当てて何かを考えている様子のネイへと近寄っていった。

「どうしたんです、ネイさん？」

「あつ、ヒイロさん」

背後から声をかけられたネイは、考え事を中断して振り返る。

「キワイルの街を出る時に、ギルドリングに表記される名前を変えられるかもしれないってヒイロさんが言ってたじゃないですか。だから、どんな名前がいいか考えてたんです」

「何かいい名前は浮かびましたか？」

ヒイロに問われ、ネイは再び思考の世界へと足を踏み入れた。

「うゝん、本名は橋翔子なんです、それに近い名前の方が愛着が湧くと思うんですけど……ヒイロさんはどうやって今の名前を決めたんです？」

いい名前が思いつかず、参考までにと聞くネイ。

「私ですか？ 私はゲームなどで使っていた名前が咄嗟に出ましたね」

「へえ、ゲームで使ってた名前ですか」

「ネイさんはゲームではどのような名前を使ってたんですか？」

アニメに造詣が深い彼女ならば、ゲームをやっているもおかしくないだろうというヒイロの質問に、ネイはもう遠い昔のように思えてしまう元の世界のことを思い浮かべる。

「私は、同性ならそのまま、男性ならショウウって付けてましたね」

「ショウウ……ですか。虫のようなロボットに乗ってた方ですね。確かあの方は妖精的なも

のと一緒に行動していましたけど……ネイさんも常にニアを連れて歩きますか？」

「勘弁してください」

「それ、どういう意味？」

ヒイロのボケに苦笑いで答えるネイの背後に、いつの間にかニアが浮かんでいた。

突然のニアの声に「ひゃっ！」と可愛い声を上げたネイは、咄嗟にヒイロの横へと飛び退き振り返る。そしてその視線の先で、普段表情豊かなニアが無表情かつジト目でこちらを睨んでいることに気付き、浮かべていた苦笑いを引き攣らせた。

「べ……別に、ニアちゃんを嫌ってるわけじゃないの。ヒイロさんのボケに咄嗟に返した結果と申しましょうか……」

「ふん……」

ネイはしどろもどろに、後半は敬語になるほど混乱しながら、必死に言い訳を捻り出しつつ助けを求めてヒイロへと視線を向ける。その言い訳にニアは、ホバリングしながら腰に手を当てて、興味なさそうな返事とともに視線をヒイロに移す。

ネイからは哀願されるような、ニアからは冷ややかな視線を向けられたヒイロは、「ふう」と一息を吐いた後で微笑んだ。

「まあ、そんな感じですよニア。ネイさんは別に貴女を嫌ってるわけじゃありません」

「……そつ、じゃあいいや」

ヒイロの顔をしばらく見つめていたニアは、素っ気なく返事してアッサリと引き下がる。

ネイはバラットの方に飛んでいくニアを笑顔で手を振りながら見送ってから、懇願するようにヒイロを見た。

「ヒイロさん！ ニアちゃんは本当に分かってくれたの？ 後でちゃんと説明しといてくださいね」

「大丈夫ですよ、ニアは本当に怒っていればその場で捲し立てますから。引き下がった時点で、分かってくれたってことです」

「本当……？」

ヒイロは自分の話を聞いても不安な表情を引つ込めないネイに小さくため息をつきつつ、ニアへ視線を向けて小さく微笑む。その視線の先には、さっきの不機嫌そうな雰囲気は何処へやら、バラットと談笑するニアの姿があった。

「ニアは鬱憤を溜め込まない性分なんですよ。その辺のことで心配している時点で、ネイさんはまだまだパーティに馴染んでいないってことですな」

「そんなこと言われても、私はパーティに入ってからまだ一週間も経っていないんですよ。皆の心理を理解するには時間が足りませんよ」

（ふむ、確かにそうですね。でもまあ、文字通り時間が解決してくれるでしょう）

七輪に載ったキノコから醤油の香ばしい匂いが漂ってくる中、ネイが完全にパーティーに溶け込むのを気長に待とうと、ヒイロは静かに微笑んだ。

日がすっかり沈む頃、ヒイロのライトの魔法を照明代わりにして夕食が始まる。

今日の夕飯は白身魚の炊き込みご飯と、キノコの醤油焼きにキノコの味噌汁。

まずは炊き込みご飯を口に運んだヒイロとネイは、同時に微妙な表情を浮かべた。

「うーん、醤油を入れた出汁に漬けてみましたが、やっぱり魚臭さが抜けきってませんね。みりんが欲しいところです」

「それにこの魚、全然鯛っぽくないよ」

「形がそれっぽかったのでもしかしたらとは思ったのですが、さすがに味までは似てませんでしたか」

鯛めしを想像していた為に期待を裏切られてしまった感のある二人に対し、他の皆は美味しそうに炊き込みご飯を頬張る。

「そんなに不味いか？ 俺には十分に美味しく感じるが」

「ですよ。とても美味しいです」

「んんん、んーん」

バーラットの感想にレミーが賛同し、魚の切り身を口に頬張っているニアもそれに

頷く。

「確かに不味くはないんですけど、目指した味には程遠いというか……」

「な〜に贅言言つてんだ。野営でこんだけの飯が食えるだけでありがてえつてもんだ。普通の野営での飯っていったら、硬いパンと塩のスープが定番だから」

そう言つてキノコの醤油焼きに箸付き、美味しそうに酒で流し込むバーラットに、ヒイロは冷やかな視線を向ける。

「バーラットの場合、そんな食事でもお酒があれば満足してたんじゃないですか？」

ヒイロの返しに、バーラットは「違うない」と豪快に笑う。そんな二人のやりとりを見て、ネイは少し俯いた。

「ヒイロさんは私がまだパーティーに馴染んでないと言っただけど、思ってみればヒイロさん自身、バーラットさんとニアちゃんは呼び捨てなのに、私はさん付けで呼んでるよね。あれ、すごい距離を感じるんだけど」

声のトーンを下げ、俯いた状態から上目遣いに睨んでくるネイに対し、ヒイロはかつてのバーラットとニアとの攻防を思い出して固まる。あの時も似たような状況で粘られ、結局さん付けをやめるまでしつこかった。

そして、ネイの隣に座って彼女の発言を聞いていたレミーが、ハツとした様子でヒイロを見やった。

「ネイさん……いえ、あえてネイと呼ばせてもらいます」

「構わないわ。そっちの方が親近感が湧くもんね。それでどうしたのレミー」

「聞いてくださいネイ。ヒイロさんは私と出会って三十日近くになるというのに、まだ私のことをさん付けで呼ぶんです！　もしかして、ヒイロさんは私達のことを仲間とは思っていないのでしょうか」

「何ですって！」

よよよとネイの肩にしなだれかかるレミー。ネイはそんな彼女の頭を優しく撫でつつ、キッとヒイロを睨む。

「何で酷い仕打ちをするんですか、ヒイロさん！」

二人の芝居がかった糾弾に、ヒイロは頬を引き攣らせながら助けを求めてバーラットとニアの方に視線を向ける。が、二人は我関せずといった様子で、黙々と食事を進めていた。

「バーラット、ニア……」

「俺はとくに二人とも呼び捨てだぞ」

「ばくもそう。前にも言ったけどヒイロのそれ、すつごい他人行儀だから」

たまらず声をかけたのだが、返ってくるのは冷たい追い討ち。

（四面……楚歌ですか……）

周りに仲間無しと気付き、ヒイロは自分で何とかするしかないと言え、ネイ達の方に向き直る。

「これは、口癖みたいなものなんですよ……大体、ネイさんとレミーさんだつて私をさん付けで呼んでるじゃないですか」

少し拗ねたような口調のヒイロに、ネイとレミーはわざとらしく肩を竦めてみせる。

「ヒイロさんは年上だから、私達がさん付けするのは当然でしょう。実際、バーラットさんにはそうしてるもの」

「そうです。私達がヒイロさんと呼び捨てにしたら、おかしいじゃないですか」

目上の者には敬称を使うという正論を持ち出され、ヒイロはぐうの音も出なくなる。そして仕方なく覚悟を決めてゴクリと喉を鳴らした。

（この問題を引きずると、後々まで尾を引くのはバーラットとニアで実証済みですからねえ……ここは折れてさつさとこの問題から解放されましょう。どうせ、何かのきっかけでもなければ、私はずっとさん付けで呼んでしまうでしょうし）

「ネイ……レミー……これでいいですか」

ヒイロに呼び捨てにされたネイとレミーは満足そうに頷くと、視線を交わしてニッコリと微笑み合う。しかしその脇では、ヒイロ達のやり取りを黙って見ていたニアが呆れたような表情でバーラットに囁いていた。

「名前の後の間……」

「そう言ってやるな。腰の低さが骨の髄まで染み込んでしまってるヒイロの最大限の譲歩だろうからな。俺達の時みたく、慣れるまで待つてやればいいさ」
突っ込みたくてウズウズしているニアを宥めつつ、バーラットはヒイロ達三人の様子を宥にニヤつきながらエールを叫んだ。

第2話 勇者の話と新魔法

ヒイロとネイ、レミーの間に一悶着あった夜から三日後。一行は順調に旅を続けていた。
「そういえば、ネイは勇者だったよな」

ホクトーリク王国王都セントールまで後ももう少しという距離に迫り、街道を行き交う人も増え始めた頃。バーラットは人が途切れたのを見計らって、唐突にそんな質問をネイにぶつけた。

「えっ！……あつ、はい。そうですけど……」

ある程度信頼を得られてからと思い、ギリギリまで待ったバーラットの質問は、それでもネイとついでに事情を知るヒイロまでもギクリとさせた。

「ヒイロもそうらしいが、勇者つてのは一体、何人いるんだ？」

「私と一緒に召喚されたのは、私を入れて十人でした。ヒイロさんを含めれば十一人ですわね」

「ふむ……十人か……」

ネイが緊張した面持ちで答えると、前に行くバーラットは顎に手を当てて考え込む。

バーラットのそんな様子に、隣を歩くヒイロはドキドキしながら下から覗き込むように彼の顔を窺う。

「……もしかして、国に報告する為の情報収集ですか？」

意を決し、恐る恐るといった感じでヒイロが問いかけると、バーラットは地面に向けていた視線を彼へと移し、意味ありげにニヤリと笑ってみせた。

そのドラゴンすら怯えさせるような極悪な笑みに、正面から見たヒイロと横顔しか見えなかったネイは戦々恐々と顔を引き攣らせる。

二人は『もしかして、バーラットは自分達を国に売るつもりではないのか？』などと思ってしまう。それ程までに、彼の笑みは見る者に不安を与えるものだったのだ。

だが、次にバーラットから出た言葉は——
「違う。言い訳の為の情報収集だ」

そんな二人の予想を裏切るものだった。

「言い訳え？」

要らぬ緊張から解放されたヒイロが気の抜けた返事をする、バーラットは重々しく頷く。

「ああ、エンペラーレイクサーペントの牙の出所は、どうしても国に報告しなければいけない。だから、その言い訳探しだ」

「ふん……で、なんかいい嘘でも思いついた?」

バーラットのあくどい笑顔に興味をそそられ、ヒイロの頭の上に寝そべっていたニアが上半身を起こしてそう聞くと、彼は再び顎に手を当てた。

「そうだな……勇者が十人というのは、真実味を持たせるのに実にいい人数だ。エンペラーレイクサーペントは勇者が倒した……そして、ヒイロは偶然その場に居合わせて、落ちていた牙を拾ったことにする。どうだ、それらしいだろ」

「それは……なんとも」

国に対して虚偽の報告を目論んでいるバーラットへ、ヒイロは微妙な表情を浮かべる。そんな彼にバーラットは問題ないとばかりに、凶悪に見えるほど口角を上げて見せた。

「最初に勇者が十人いるらしいと言っておいて、その後にエンペラーレイクサーペントは勇者が倒したって報告するんだ。ヒイロも勇者だろ、俺は別に十人の勇者が倒したとは言わん。勇者が倒したエンペラーレイクサーペントの素材をヒイロが手に入れたんだ。嘘は言ってねえんだから問題はないだろ」

「大部分を真実で固めておいて、その中に嘘を一片混ぜる、あるいは与えたくない情報は口にしない。相手に与える情報を操作する場合の常套手段ですね。お見事ですバーラットさん」

「ホント、バーラットって悪知恵が働くよね。本当に冒険者? 職業偽ってない?」

バーラットの考えたシナリオに、バーラットの後ろを歩くレミーと、ヒイロの頭の上のニアが楽しそうに賛成した。ニアの言い様などは下手をすればバカにしているようにも取れるが、バーラットは氣にした様子もなくガハと上機嫌に笑っている。そんな中、ヒイロとネイだけは微妙な顔をしていた。

「私達を匿う為の方便ですから、ありがたく思ってくださいが……」

「国に対して偽るような真似をしていいのかな?」

元々小市民のヒイロとネイはそんな大それたシナリオに合わせないといけないのかと思うと、今の時点で緊張してしまっていた。

「別にいいんだよ、嘘は言っていないからな。それで他の勇者達は今、何処にいるんだ?」

「……チュリ国。シコクに封じられていた魔族達が結界の綻びから抜け出し、チュリ国のカマオス領を瞬時に制圧したの。私達は魔族からカマオス領を奪還する為に戦ったのよ」

「チュリ国……か、遠いな。神の召喚によりホクトーリク王国に降り立った勇者達が、

チュリ国に向かう途中でエンペラーレイクサーペントを倒した……不可能ではないが、その道中の足取りが全くないのでは説得力がなくなる可能性がある」

バーラットとネイのやり取りを聞いていたレミーが、バツと手を挙げる。

「時間的にはどうなんですか？ 時間が経ってれば、冒険者のような一団体の足取りなんてなかなか追えるものではないと思いますが」

レミーの提案に、バーラットは再び顎に手を当てて思案する。

「ふむ、エンペラーレイクサーペントの目撃情報は滅多にないから、いつまで生きていたかは確認のしようがないか。後は、勇者の方だか……ネイ、お前達はいつこの世界に来たんだ？」

「六十日くらい前、かな」

「六十日か……なら、移動距離も計算に入れて九十日くらいにすればいいな。調べられたらチュリ国に勇者が現れた時期はすぐにバレるだろうから、その辺にしとけば多少は説得力が出るだろう」

「そうですね。それだけ時間が経ってれば、足取りが掴めなくても怪しまれないでしょうし」

話が白熱し、ヒイロと入れ替わってバーラットの隣を歩くレミーがそう言うのと、同じくヒイロの頭からバーラットの肩へと移ったニアが疑問を呈する。

「でも、勇者に直接確認されたら、すぐにバレるんじゃない？」

だが、レミーとバーラットはすぐにその疑問を否定した。

「調べるのはホクトーリク王国の諜報員でしょうから、チュリ国の重要人物である勇者達には直接の接触はしないと思いますよ」

「ああ、そんなことをすれば、ホクトーリク王国がチュリ国を探っているとバレちゃうかな。国に対してマイナスになるような行動を取るバカは諜報員にはいねえよ」

「ふーん。じゃあ、これで王様達を騙せるんだね」

ニアは、いたずら好きという妖精の種族特性を遺憾なく発揮して、楽しい笑みを浮かべた。それにつられ、情報操作の確実性に手応えを感じたバーラットとレミーもニヤニヤと笑みを零す。

そんな三人を、ヒイロとネイは後ろから嘆息しながら見つめていた。と、ひとしきり悦に入り満足したバーラットが不意に肩越しに振り返る。

「ところで、勇者の戦闘能力ってのはどんなもんだ」

国への説明の理由付けという重荷から解放されたバーラットは、個人の興味からそんな質問をネイにぶつける。彼の唐突な言葉に、ネイは目を見開いて驚いた。

「えっ！ 何でそんなことを？ まさか、勇者達との敵対が視野に入ってるの？」

バーラットの本性が酒飲みの『飲んだくれオヤジ』だと知らないネイは、彼のことを

パーティーの行動指針を示すデキる大人だと思っていた。そのパーティーが勇者の戦力を気にしたことにより、ネイに緊張が走る。

しかし当の本人はというと、笑って手の平を振りながら、軽い調子でネイの心配を否定した。

「違う違う。ただ単に、気になったただけだ。ヒイロみてえなのが他に十人もいたら、この世界が減^はるんじゃないかねえかと思っ^てな」

パーティーの言葉に全員が納得してしまう中、ただ一人ヒイロだけが慌^{あわ}てて声を荒^{あら}げる。

「ちょっと待ってくださいパーティー！ 貴方^{あなた}は私をそんな風に見てたんですか？」

「なんだ、自覚がなかったのか？」

「あんなにとんでもない攻撃^{こうげき}し^ていて、自分は無害だと思っ^てた？」

ムツとするヒイロに、パーティーとニアが反論してゲラゲラと笑う。

ヒイロをからかう空気には混^まじれないが、パーティー達の言葉^{ことば}を否定できないが故に擁護^{ようご}できないネイとレミーは、曖昧^{あいまい}な笑みを浮かべたまま三人を生暖^{なまぬる}かい目で見守っていた。

一方でムツとした様子のヒイロは、瘴気^{しょうき}事件を解決するために海岸に大穴^{あな}を空けたルナティック・レイのことを言^いわれたと思^{おも}い反論する。

「失敬^{しげい}な、アレは不可^{ふか}抗力^{かうりき}ですよ。まさか、あんな威力^{いりき}の攻撃^{こうげき}だとは思^{おも}わなかったんで

す！」

「アレってどれのこと？ 海岸^{かいぎ}沿い^えのこと？ Gを殲滅^{せんめつ}した時のこと？ それとも、ゴブリンの群^むれを一人で蹂躪^{じゅうりつ}した時のことかな？」

ねえ、ねえと聞いてくるニアにヒイロは何も言えなくなり、その様子をパーティーが大口^{おほくち}を開けて笑う。

そうこうするうちに再び街道を行き交う人々が現れ始め、妖精^{めいずら}が珍しいことも相^{あい}まって、一行は視線を集める。しかしそんな視線など気にせず、ヒイロ達はワイワイ騒^{さわ}ぎながらセinstoolに向かつて歩を進め続けたのだった。

「それ他の勇者達^{ゆうゆう}だけど、私を含めてヒイロさんみたいな破壊神^{はかいしん}はいないかな」

一通りパーティーとニアがヒイロをからかったところで、人の通りが再びなくなったのを確認したネイが先程の続きを話し始める。その言葉には、ヒイロをからかうようなニュアンスがふんだんに混^まざっていた。

それを聞いたヒイロが『ネイさんまで……』とガックシと肩を落としたが、そんな彼に苦笑^{くしょう}しつつネイは言葉^{ことば}を続ける。

「だけど、その中で一人、ある少年の持っていたスキルは、他の勇者とは一線^{かず}を画^{かく}してたかな……ヒイロさんには前にちょっと話したよね」

ネイの言葉にヒイロが頷くと、バーラットが興味津々に聞いてくる。
「ほう……どんなスキルだ？」

「細かい能力は分らないけど、剣を振るったその軌道上の物を全て切り裂いてました」
「見えない斬撃ってわけか……斬撃を飛ばしているのか、見えない刀身が伸びているのかは分からんが、確かに厄介だな。振るった剣の軌道を見切れれば躲すことも可能だろうが、死角からやられたらまず、避けようがない。受けが使えるというのも怖いな」

『全て』というネイの言葉に防具まで含まれると判断したバーラットは、武器や盾で受けてもそれごと斬られる場面を想像して渋面を作る。

「魔法の防壁なんかはどうなんですか？ 例えば、ニアちゃんのエアシールドとか」

「うーん、魔法を切ってるところは見たことがないなあ」

レミーに小首を傾げながら答えつつ、ネイはふと、思い出したかのように未だにしょげているヒイロへと視線を移した。

「そういえばヒイロさんは防衛系の魔法は持っていないの？ 瘴気の中で妖魔と戦った時は、全部の攻撃を体で受けていたけど」

ネイの疑問に、下を向いていたヒイロが顔を上げる。

「要するにバリア、ですか？ 体が異様に頑丈でしたので必要性を感じていませんでしたけど、なるほど、バリア……バリアですか……」

敵の攻撃を防御壁でカッコよく受け止める。確かに悪くはないと、ヒイロはそんな自分の姿を想像し始めるのだが――

（バリア……あの研究所のようなバリアは……いけません！ パリンと割れてしまいました。他のものにならないと……汎用で人型の決戦兵器のフィールドなら……おっ！ これも割れてしまいました）

バリアが割れる場面ばかりを想像してしまったヒイロは、すぐに頭の中から想像を振り払ったのだが……

〈【全魔法創造】により、絶対防御壁魔法、グラスバリアを創造します―創造完了しました〉

（ああっ！ それは違うんです。【全魔法創造】さん早とちりです……）

【全魔法創造】のスキルによって魔法が生み出されてしまい、ヒイロは頭を抱えた。

「どうかしたの、ヒイロさん？」

黙り込んだかと思ったら頭を抱えてガックシと肩を落とすヒイロに、ネイが心配そうに声をかける。するとヒイロはゆっくりと顔を上げ、生気のない視線を彼女に向けて小さく呟いた。

「……グラスバリア」

ヒイロが魔法を発動させると、半透明の六角形が組み合わさったドームが、あつという間に彼を包み込んだ。

「わっ！ これってバリア？ もしかして今、作ったの？」

「おいおい、相変わらずデタラメだな」

「さすがですヒイロさん。それで、この防御壁はどれくらいの強度があるんですか？」

乾いた笑みを張り付けていたヒイロだったが、最後のレミーの疑問に答えるべく、視線をニアに向ける。

「ニア、ちよつとこのバリアを蹴ってもらえます？」

「えっ、ぼく？ 大丈夫？ 蹴った足が痛くなったりしない？」

「大丈夫ですよ。軽くいいんで、やってみてください」

「軽くいいの？ じゃあ、やってみるよ」

ニアはバールットの肩から飛び立ち、恐る恐るヒイロのバリアに近付くと、言われた通りに軽く蹴った。するとヒイロを囲っていたバリアは、パリンという小気味よい音とともに、あっさりと割れて消えてしまった。

「……何だ、その防御壁は？」

ニアのつま先が当たっただけで割れてしまったことにバールットが呆れかえっている

と、ヒイロが嘆息混じりに説明し始める。

「グラスバリア……どんな攻撃も完全に防いでくれるんですが、見ての通り、一回攻撃が当たると割れてしまうんです」

「たった一回だけの完璧な防御壁か。また、使いどころの難しい魔法を生み出したものだな」

苦笑いを浮かべるバールットの隣で、ヒイロが何をイメージして魔法を作ったのか気付いたネイが「ああ」と声を上げる。

「何も、あんな壊れやすいアレを元に魔法を作らなくても……」

「防御バリアって考えたら、最初に思い浮かんだやつたんですね」

完璧な防御を手に入られなかったヒイロは、再び盛大なため息をつきつつガックリと肩を落としたのだった。

第3話 センストール

ホクトーリック王国王都センストール。

小高い丘の上に立つ王城を中心に、貴族や富裕層の住居区域がそれを囲み、更にその周

りを一般の住人達が作った街が囲む。そうしてできた巨大な街センサーは、外周を高さ十メートル程の外壁に囲まれており、堅牢な霧閉気を漂わせていた。

「何だか、息の詰まりそうな外観ですね」

街に入る為に長蛇の列の最後尾に並んだヒロは、石造りの強固な外壁を見ながら、そんな感想を述べる。

今まで訪れた街にも柵や石造りの塀などはあったが、これ程高い外壁に囲まれた街をヒロは見たことがなかった。

「まるで要塞都市……私達の感覚だと、刑務所を思い浮かべちゃうわよね」

ヒロの感想にネイが苦笑いを浮かべながら同意を示すと、そんな二人にバーラットは肩を竦めた。

「まあ、仮にも国王が住んでる所だからな、それなりに厳重に守る必要もあるさ。もともと、こうやって壁で囲って人の出入りをチェックしてても、怪しい奴の侵入を完全に防ぐことはできないんだがな」

城下町で呪術士が暗躍している——コーリの街で第二王子のフェスから聞いた王都の現状を思いながら、バーラットは街の中心に立つ城へと目を向ける。

バーラットの記憶では白く清潔感のあつた城だが、今は淡いエメラルドグリーンの光に覆われており、神秘的で荘厳な霧閉気を醸し出していた。民に対して威厳を保つのに効果

的な霧閉気ではあるが、そのエメラルドグリーンの膜が呪術攻撃への必死の抵抗の表れだと知っているバーラットは、何とも言えない気分になる。

「で、何でお前らはそんな所に並んでるんだ？」

気を取り直したバーラットが、ヒロとネイ、レミーを見回してそう聞くと、ヒロは「ん？」と眉をひそめる。

「何故って、並ばないと街に入れないからじゃないですか」

「いやいや、街に入るなら俺達はこっからじゃないんだよ」

そう言いながらバーラットは、ヒロの襟首を引つ掴み歩き始めた。

「ちよつ、バーラット……何処に行く気ですか？」

仰向けに踵をズリズリと引きずられながらヒロが尋ねると、バーラットは空いている方の手で「あっちだ」と進行方向を指し示す。

「……？」

その指し示した先には、センサーの街を囲む外壁が大きな曲線を描いているだけで、他には何も見えない。彼が何を指し示したのか分からず、ヒロは引きずられたまま腕を組み小首を傾げた。

すると、二人の後をついてきたレミーが思いついたように口を開く。

「もしかして、違う門から入るんですか？」

「ああ、あの南門は一般の民用の門だからな、並んでるだけで日が暮れちまう。だから、俺達は王族、貴族用の西門から入るんだよ」

「身分で入る場所が違うんですか？」

バーラットの手から逃れ自分の足で歩き始めたヒロが驚きの声を上げると、バーラットとレミーはそんなことに驚いた彼を逆に驚きの視線で見つめる。

「お前なあ、王族や貴族が一般の民に交じってアレに並ぶと思ってるのか？」

三百人を超えるかという長蛇の列を、呆れたように指し示すバーラット。ヒロは律儀に列に並ぶ王様を想像し、慌ててブンブンと首を振った。

「確かにそれはありえない光景ですな」

「だろ。王都センストールには四つの門があつてな、王族や貴族用の西門、一般の旅人や冒険者など用の南門、物資を運んでくる商人用の東門。そして、この街の住人用の北門と、肩書きによって通れる門が違うんだよ」

「あれ？ だったら私達が入るのは、さっきの所で合っているんじゃないの？」

自分達の肩書きは冒険者。だったら南門から入るのが正解なのではないかというネイのもつともな疑問に、バーラットはニヤリと笑ってみせる。

「騎士爵という肩書きを知っているか？」

バーラットの得意げな質問に、ヒロと彼の頭上のニア、それにネイも同時に首を左

右に振る。しかしレミーだけは頷いた。

「騎士の中でも多大な功績を上げた者に与えられる肩書きですよな。確か、子に継がせることができない一代限りの貴族としての称号だとか……」

「ああ、その通りだ。その騎士爵という肩書きだがな、贈られるのは騎士だけじゃないんだ」

「まさか！」

ヒロの驚きの声に、バーラットは満面の笑みを浮かべる。

「Sランク以上の冒険者でも、国に対して多大な貢献をすれば授与されるんだよ」

「っていうことは、バーラットさんも貴族ってこと？」

羨望の眼差しを向けるネイ。しかし一方で、バーラットの自慢げで凶悪な笑みを前に、ニアとヒロがブハツと噴き出した。

「アッハハハハハ……バーラットが貴族うー？ 似合わない！ 山賊王とか言われた方がよっぽどしっくりくるよ」

「ククク……ニア、笑ってはバーラットに悪いですよ。でも……」

頭の上で腹を抱えて大笑いするニアを、自分は必死に笑いを堪えて宥めようとするヒロ。しかしそんな彼も、チラツとバーラットを見て思わず言葉が漏らす。

「バーラット……ククク……一度、『山賊王に俺はなる！』って宣言してもらっていいで

すか?」

「はあ?」

「ブツ!!」

ヒイロの悪ふざけで、バーラットは何のことかと顔を顰めたが、今まで状況についていけずにキョトンとしていたネイが思いっきり噴き出した。

「ヒ……ヒイロさん……その一言は言っちゃいけない一言だよ……ブツ」

「えっ! ネイまで! ちょっと、笑ったらバーラットさんに失礼ですよ」

大笑いを続けていたニアと、必死に口を押さえて笑いを堪えるヒイロとネイ。そんな三人を前にしてレミーがオロオロしながら忠告するが、彼女の背後では、さすがに自分がバカにされていると気付いたバーラットがこめかみに青筋を浮かべていた。

「騎士爵、バーラット様。確認できました、お通りください」

小一時間程外壁の外側を回ってやっと辿り着いた西門で、バーラットはギルドリングを提示する。すると門番をしていた兵士はタブレット型の魔道具でその情報を読み取って、すぐさま畏まったように敬礼した。

「ああ、通らせてもらうぞ」

バーラットが軽く手を上げてアーチ状の門を通り抜けると、ヒイロ達もそれぞれギルド

リングのチェックを受けてからそれに続く。

ヒイロとネイ、ニアの頭頂部には大きなたんこぶができていた。バーラットによる鉄拳制裁の結果である。

「ふう……特に問題なく入れましたね」

「南門を通るよりよっぽど早かっただろ」

たんこぶをさすりながらのヒイロの言葉に返しながら、バーラットは辺りを見回す。

門を抜けた先には落ち葉一つない、清掃が行き届いた石畳の広い道が続いていた。

道の左右には、街路樹と魔導式の街灯が並び、更にその外側に見るからに格式高そうな店々が並ぶ。しかし、立派に整備された道とそれに見合う店が並んでいるにもかかわらず、人通りはほとんどなく閑散としていて、今までの街で見たような活気はなかった。

「何だか寂しい所ですね」

王都がどれ程賑やかな所かと楽しみにしていたヒイロが、落胆したように呟く。

「ここには貴族様御用達の店しかないからな。貴族は基本、店の者を自分の屋敷に呼んで品物を買うから、店に客が来ることはほとんどないんだ。で、俺達にはここにあるような高級な宿には用はねえから、さっさと活気のある場所に移るぞ」

バーラットはそう言うスタスタと歩き始めた。

「バーラットさんって、コーリの街ではあんなに立派な屋敷に住んでいるのに、宿は安宿

を好みますよね」

「えっ！ バラットさん、屋敷に住んでるの？」

バラットの後に付いて歩き始めながら、彼に聞こえないようにレミーが呟くと、ネイが小声で驚く。その声に、ヒロロとニアがコクリと頷いた。

「何でも、貴族から騙し取ったらしいよ」

「ニア、それは盛り過ぎです。安く買い叩いたんですよ」

ヒロロがニアの話を訂正すると、ネイは目を丸くした。

「どっちにしても、とんでもない話よね」

「コーリの街では武勇伝になってる話ですからね」

「ハハ……何だかバラットさんらしいとかなんというか」

レミーに苦笑いでネイが返しているとクルツとバラットが振り返る。

「お前ら、何をコソコソと話してるんだ？」

「何でもないですよ、バラット」

背後でヒソヒソと話され、先程のことあつて釘を刺してきたバラットに、ヒロロ達はハイハイとその足を早めたのだった。

「ほほう、こっちは随分と活気がありますねえ」

閑散としていて街としては寂しい印象があつた西側と違い、騒音、喧騒、談笑などうるさいくらいの街中を歩きつつ、こうでなくてはと嬉しそうにヒロロは辺りを見回す。

石畳でできた広い道路に魔導式の街灯と街路樹といった街の作りは西側と同じだが、道を行き交う人々の密度と道沿いに並ぶ店の活気があちらとは正反対だった。

「うわあ、賑わってるなあ。ここの魔法屋だったら、コーリの街より品揃えがいいかな？」

「フフフツ、牙を売ったお陰で懐は暖かいですから、好きな魔法を買えますよニア」

「『本当!!』」

コーリの街と比べても遥かに賑わっている街並みをヒロロの懐から覗いてテンションを上げるニア。そんな彼女にヒロロが得意げに答えると、ネイとレミーまで目を輝かせた。

「えっ！ ……ええ、大丈夫……大丈夫だと思えます……」

女性陣の買い物欲から来る迫力に、ヒロロは暖かい筈の懐が急に心細く感じて、自身に言い聞かせるように答える。その横では、バラットが腰に手を当てながらため息をついていた。

「お前らなあ、すっかり観光気分みてえだが当初の目的を忘れてないだろうな。まずは宿を取って、それから登城だ。観光はやることをやってからにしてくれ」

「そういえばそうでしたね……って、この辺りで宿を取るんですか？」

「ん？ 宿を取らんで、何処に泊まる気だ？」

疑問の意味が分ならずバーラットが首を傾げると、ヒイロは不思議そうな表情のまま口を開く。

「バーラットのお父さんはこの街に住んでるんですね。ですから、てっきりバーラットのご実家にご厄介になるものだと思っていたのですけど」

「ああ、ヒイロには話してたんだったな……実家には泊まらん。というか、泊まりたくない」

心底嫌そうにキツバリと言い切るバーラット。そんな彼を困惑気味に見ていたヒイロの肩口から、不意にネイが耳元に口を寄せる。

「ヒイロさん、察してあげて。バーラットさんはきつと、お父さんとの折り合いが悪いのよ」

「多分そうですね、ヒイロさん。バーラットさんはあんな性格ですから、きつと勘当されているんです」

反対側の耳元からレミーがそう補足すると、ヒイロの胸元ではニアが腕を組み「うん、あり得るね」と訳知り顔で頷いていた。

勝手に推測、結論付けされたバーラットの事情に、ヒイロは哀れみの視線を彼に向ける。「バーラット……早くお父さんと和解するべきです。実の親子なんですから、真摯に話せばきつとお父さんは分かってくれる筈です」

「お前ら……勝手に何を想像した？」

目まで潤ませたヒイロの見当違いの説得に、バーラットは頬をヒクつかせながら拳を震わせて顔の横まで上げた。

すると、街の外での出来事が頭を過ぎったネイが咄嗟に両手で頭を庇い、ニアはヒイロの懷に奥へと潜り込む。加えてヒイロは「20パーセント！」と【超越者】まで発動し、その防御力を高めた。しかし――

「アホか！ こんなことで戦闘態勢に入る奴がいるか！」

バーラットが拳をチョキに変えて突いてきた指が、的確にヒイロの目を捉える。

「おおおおおっ！」
「防御力をいくら上げようが、弱点を突けばいくらでも攻撃方法はあるんだ。慢心はしないことだな」

両目を押さえ、その場にしゃがみ込んで痛みに震えるヒイロ。それを見下ろしたバーラットが満足げに吐き捨てると、ヒイロは震えながらコクコクと頷いた。

「さて、バカやってないでさっさと行くぞ」

バーラットが踵を返して歩き出す。まだ涙目で視界が覚束ないヒイロはネイとレミーに両側から腕を組まれてその後を追ひ、一行はバーラット行きつけの宿へと向かった。

「やつぱり、謁見の間みたいな所に連れて行かれるんですかねえ……」

一夜明け、城へと続く坂道を登りながら、ヒイロは嫌そうに嘆息する。

王城へと向かう石畳でできた道は、凹凸はほとんどないが表面がザラザラしており、馬車がすれ違える程広く坂でも登りやすい。道の左右は芝が綺麗に刈られ見晴らしがよく、坂に沿うように吹き下ろしてくる風が心地好かった。

正面には薄い緑色の膜に覆われた幻想的な城が見え、振り返った眼下には色とりどりの西洋瓦が目美しい街並みが広がる。

快晴ということもあって異世界感満載の素晴らしい風景なのだが、その道を行く一行の心内はどんよりと曇っていた。

そんな中、ネイがため息混じりに口を開く。

「中央奥の立派な椅子に王様が座っていて、王様の両脇にはお偉いさんがずらり。そして衛兵が私達を扶むように並ぶ中、膝をついて頭を下げるのかな？ どうしよう……私、そんな所の作法なんて知らないわよ」

「私もですう。そんな所に連れていかれたら、緊張で失神してしまうかも」

やけに明確な想像をするネイにレミーが同調し、二人して体を寄せ合いながら身を震わせる。

ヒイロがそんな二人を見ながら「分かります」としみじみ頷いていると、バーラットが

ヒラヒラと手の平を振ってそれを否定した。

「話す内容が内容だからな、そんな公の会見にはならんよ。精々、ゲストルームに呼ばれてお偉いさん達と密談つてところだな」

「どちらにしても、お偉いさんは付いてくるんですね」

「当然だろ。なんせエンペラークラスの素材の話をするんだ、陛下と王太子殿下は間違はなく顔を出すだろうさ」

「……この国のツートップじゃないですか。でしたら、厳格な場所じゃなくても緊張の度合いはさほど変わりませんよ」

ヒイロはバーラットの返答にため息をつき、バーラットもできれば顔を合わせたくはないのだろう、渋面を作る。その彼の様子を見て、ヒイロ達はますます肩を落とした。

そんな中、ヒイロの懐にいるニアは一人お気楽に口を開いた。

「そんなに気にすることないんじゃない？ 呼び出したのはあっちゃんだから、ぼく達が気負う必要はないと思うんだけど」

ニアにとって、人間世界の肩書きなど気にならない。むしろそれよりも、これからその偉い人達を謀るのかと思うと楽しみで、自然と笑みが溢れてしまっていた。

「ニア……貴女はこれから私達が行くことを娯楽なんかと勘違いしていませんか？」

「ん？ 違うの？」

懐からヒイロを見上げながら無邪気に笑うニアを見下ろし、ヒイロはかぶりを振る。「違います。これから私達が行うのは、この国の頂点に立つ人達を騙す行為なんです。一つ間違えれば首が飛ぶかもしれないんですよ」

「えー！ それはやだなあ」

暗い表情のヒイロの口から出た言葉を聞いて、ニアは口を尖らせ、ネイトレミーの肩が重石が乗ったようにもう一段下がる。

まるでお通夜のような雰囲気漂わせ始めたヒイロ達に、バーラットが再びヒラヒラと手の平を振った。

「さすがに首が飛ぶようなところまではいかんさ。バレた場合は精々、陛下がヒイロに興味を持たれるだけだ」

「うぐう！ ……それで国に仕えるように勧誘されるんですか？」

思わず腰が引けて手で防御姿勢を取るヒイロに、バーラットは軽く肩を竦める。

「それはあるかもしれないが、恐らく強制にはならんよ。陛下は人を力づくで従えさせるようなことを嫌う方だからな」

「それはまた、器の大きい王様みたいですが…それでも、お偉い人の申し出を断るのは心苦しいですねえ」

「なーに、こっちの話を信じさせればいいだけだ。だから、あまり気を落とすな。そうい

う表情をしていると勘付かれるぞ」

「……そんなこと言われても、腹芸は苦手なんですよ」

胃の辺りが痛いような気がしたヒイロがみぞおちの辺りをさすっていると、バーラットとニアが揃ってニヤリと笑ってみせる。

「な〜に、そっちは俺がなんとかする」

「そうそう、バーラットとぼくに任せとけば大丈夫だよ。ヒイロは精一杯、澄ました顔でいてくれればいいから」

「バーラットとニアのその顔を見ていると、すつつつごい心配になるんですけどねえ」

ヒイロは城門を目前にして、バーラットとニアの見事な悪党顔に、この世界に胃薬はないんでしょかなどと思いつつため息をついた。

第4話 謁見

城門でバーラットが門兵に用件を伝え、数分後。

慌てた様子で現れた燕尾服をピシッと決めた老執事に連れられ、ヒイロ達は一階奥の部

屋へと通されていた。

部屋の大きさは二十畳程。チリ一つ落ちていない床は鏡のように磨かれた大理石で、壁は清潔感のある白一色に統一されている。部屋の真ん中には楕円形のテーブルが置かれており、それを挟むように五人は座れる高そうなソファが向かい合う形で置かれていた。ドアを入って右側の壁には暖炉が備え付けられ、左側には高価そうな風景画が数枚かかっている。正面の壁には、中央にガラスのはめ込まれた大きな両開きの扉があり、その扉の先は半円状のテラスに通じていて、そこから眼下にセンストールの街並みが一望できた。

そんな見るからに格式高い部屋で、バーラットがドッシリとソファの真ん中に座っている一方で、他の面々は自分の居場所を定められずに部屋の中を落ち着かない様子でウロウロしていた。

そして待つこと十数分。

「お前ら、少しは落ち着いたらどうだ？」

「いやいや、こう……周りの物が全部高そうだと、何となく落ち着かなくて……」

バーラットの言葉に、その良さが分からないなりに風景画を眺めていたヒイロが振り返ると、ネイとレミーがコクコクと無言で頷き同意する。そんな仲間の反応に、「分からないがな」とバーラットが苦笑したところで、突然ドアが開いた。

「バーラットおじ様！」

ノックもなしに開いたドアの向こうから勢いよく部屋に飛び込んできたのは、サラサラの金髪が印象的な、まだ可愛らしさが残る十二、三歳くらいの少年。

「フェス王子」

部屋に入るなり一目散に自分の下に駆け寄ってくる少年に、バーラットは立ち上がりながらその名を呼ぶ。

「王子!?」

少年の正体を知っていたレミーは見た瞬間に身体を直立不動に硬直させていたが、誰だか分からなかったヒイロとネイは、バーラットの言葉を聞いて驚きに目を見開いた。

「ああ、王太子の三男だ」

「……王太子様のお子さん……ということは、王様のお孫さんですか！」

バーラットの両手を握ってブンブンと上下に振り、再会の嬉しさを表現してくるフェス王子。バーラットが彼を紹介すると、ヒイロとネイは慌てて頭を下げ、天井のシャンデリアに腰掛けて足をブラブラさせていたニアは「ふーん」と興味なさそうに相槌を打つ。

「あつ、フェスリマス・フォン・セイル・ホクトリックです」

頭を下げられてようやくヒイロ達の存在に気付いたフェス王子は、軽く挨拶してからバーラットに視線を向ける。その表情には『どなたですか?』という疑問の色が浮かんで

いた。

「俺の冒険者仲間だ」

「ああ、そうでしたか。では、僕のことは気楽にフェスと呼んでください」

バーラットが気を許した仲間だと知ってそう言うフェス王子。だが、ヒイロとネイ、レミーは自己紹介しつつ「滅相めつそうもない」と思いつき恐縮した。

それを見たフェス王子は、信じられないといった面持ちでバーラットに振り返る。

「……バーラットおじ様のお仲間の割には、随分と謙虚けんこな方々ですね」

「失敬な。俺だって礼が必要な場所では、ちゃんと作法に則のっとって行動しているぞ」

「バーラットおじ様の場合、俺は誰にも縛しばられないってオーラを頭を下げながらも全身から滲にじみ出しているじゃないですか」

「ふっはっはっ、否定はできないな」

親しげに話すバーラットとフェス王子を見て、ネイがヒイロに近付く。

「なんか、仲がいいわよね。バーラットさんって王族とどんな関係なのかな？」

「私も分からないんですよ。面識めんしきがあることは知っていたんですが、ここまでフレンドリーに会話する関係だったとは、私も驚いているんです」

「そう、なんだ。でも……」

ヒイロとヒソヒソ話をしながら、ネイはふと違和感いわかんに気付いて口に手を当てる。

「フェスリマス王子のバーラットおじ様ってという呼び方、おかしくない？」

「と、いうと？」

「信頼、尊敬そんけいしている年配の人だとしても、王族が自分より肩書きの低い者を様付けで呼ぶかな？ 周りが止めると思うんだよね、王族の沽券こけんに関わることだから」

事実、ネイが勇者としてチュリ国にいた時、チュリ国の王族は皆偉そうにしていた。勇者だからといって、彼女からはおいそれと話しかけられなかったことを思い出す。

「王権制度では王族は国の頂点。その威厳を下げるようなことはしない筈なの。でなければ下の者に軽く見られて足を掬すくわれてしまうから……そうなると、国は荒れてしまう」

「ふむ、王族が舐なめられれば下の者が緩み、政も上手く回らなくなっていく可能性があるということですか……であれば、あの呼び方は二人の時だけに使う愛称あいしょうみたいなものでしょうか？」

「フェスリマス王子は、コーリの冒険者ギルドでもバーラットおじ様と呼んでいましたよ。もつとも、聞いていたのは騎士の皆さんとギルド職員だけでしたけど」

二人のヒソヒソ話に加わったレミーがヒイロの推測を否定した。三人はバーラットが何故フェス王子からおじ様なんて似合わない敬称で呼ばれているのか分からず、うーんと唸うなり始める。

しかしいくら考えても答えが出ず、痺しびれを切らしたネイがいつそのこと本人に聞いてみ

ようかと提案したところで、ドアが再び開いた。

「うん？ フェスリマス王子、こちらにおいてでしたか」

ドアを開けて現れたのは、近衛騎士団団長ベルゼルク卿。

濃い青を基調とした服装をしたガタイのいい老紳士は、フェス王子を見やりながら、すぐに身を翻しドアの脇に立つ。

そして、ベルゼルク卿が開けたドアの向こうから二人の男性が入ってきた。

一人は白髪と白い立派な口髭を蓄えた、温和そうな小柄な老人。もう一人は、三十代前半くらいの見た目の、笑みを絶やさぬ優男風の男。

二人が部屋に入ると、ベルゼルク卿は静かに扉を閉めた。

見るからに貴族らしき格好のベルゼルク卿がドアボーイの真似をするということは、入ってきた二人が偉くないわけがない。そう判断したヒイロ達の間に緊張が走る。

と、その推測が正解であるように、フェス王子とじゃれ合っていたバーラットが姿勢を正し恭しく頭を下げたため、ヒイロ達は慌てて彼に倣う。

「バルディアス陛下、ソルディアス王太子。呼び出しに応じバーラット、参上いたしました」

頭を下げたままのバーラットの言葉に、バルディアス王は「うむ」と軽く頷きながら答え、テーブルを挟んで彼と向かい合うようにソファに腰掛けた。



立ち読みサンプル はここまで

訪れた一瞬の沈黙が、ヒイロにはとても長く感じられた。思わずチロっと上目遣いで前を見た彼だったが、まだ頭を下げているパラットの後ろ姿が見えて慌てて目を伏せる。まるで物理的に重さを感じるような空気感の中、突然それをぶち壊す軽快な声が響いた。「パラット、型通りの挨拶なんていいよ。私も父も君の忠誠なんか望んでないし、第一その調子じゃあ肩がこっちゃうからね」

軽快な声の主であるソルディアス王太子は笑みを浮かべて、ヒラヒラと手を振りながらバルディアス王の隣に座る。ベルゼルク卿は二人の背後に立ち、フェス王子がその横に並んだ。

「相変わらず軽いな、ソルディアス王太子」

顔を上げたパラットが鼻で笑いながらソファにドサッと腰掛けると、ヒイロ達がギクシヤクした動きでその背後に並ぶ。そんなヒイロ達に、バルディアス王の鋭い視線が向けられる。

「ん？ そちらの御仁達は何者かな？」

「俺の仲間です」

パラットが口元を緩めながら端的に説明すると、バルディアス王は細めていた目を驚きに見開く。

「はほう、長く一人で活動していたお主がパーティを組んだのか」

「ええ、成り行きでいつの間にか」

パラットの返事に、興味深そうにソルディアス王太子が聞く。

「成り行き……ねえ。足手まといはいらないと頑なにパーティを組まなかった君がそばに置いとくんだ、ただの冒険者ではないのだから。それが一気に三人もかい？」

「四人だよ」

ソルディアス王太子の言葉に、間髪を容れずに頭上からニアアが突っ込む。突然シャンデリアから降ってきた声に、バルディアス王達は一斉に見上げて、そこに座るニアアを見つけた。

「妖精……か」

バルディアス王が小さく呟くと、ソルディアス王太子が口元を緩めた。

「ははっ、彼女は見るからにただ者ではないねえ」

「申し訳ありませんバルディアス陛下。アレもパーティの一員なのですが、妖精故に人の礼儀に疎いもので」

パラットがバルディアス王に弁解している間に、ヒイロが慌ててニアアを手招きする。

「ニアア！ そんなところから見下ろすなんて失礼ですよ！ 早く降りてきてください」

「ん、分かったよ」

ヒイロに言われて面倒臭そうに彼の肩へと降り立ったニアアは、バルディアス王達に向